

# 臨床研究部便り 第1号 (2003年7月)

臨床研究部長 下田 照文

今後、2ヶ月に1回、「みなみ福岡」に臨床研究部便りを掲載することになりました。

国立病院・療養所の存在意義は政策医療を実施することにあります。臨床研究部の主な仕事は、政策医療4本柱の中で、臨床研究と治験の推進です。当院は、免疫異常の基幹施設、重心・生育医療の専門施設、呼吸器疾患の一般施設としての機能が付与されていますので、これらの臨床研究をサポートしています。毎年20題前後の研究課題が提出されていますが、すべて医師によるものです。これからはコメディカルの方々の研究も積極的に支援して、病院全体の医療の質を上げたいと思っていますので、どしどし研究計画書の提出をお願いいたします。研究成果に対しては、最優秀論文賞1編、優秀論文賞2～4編を選出し賞金を贈呈しますので、お金に困っている方は一発狙ってください。もちろん、鶴谷賞、廣瀬賞は例年通り募集します。いずれも全職員に受賞するチャンスがありますので奮闘努力をお願いいたします。私自身は、CRC(治験コーディネーター)とともに、毎日、高張食塩水吸入誘発喀痰検査を行い、アレルギー性気道炎症の病態解明と喘息治療における Early Intervention の有用性に関する研究を行っています。今回は初めての研究部便りということで、6名の室長に各自の抱負を書いていただきました。治験に関しては、治験管理室ニュースをCRCに書いてもらいました。

## ・免疫研究室長 柴田瑠美子(小児科医長)

食物アレルギー・アトピー性皮膚炎の重症、難治例が増加しており、その治療研究は専門医療機関として重要である。厚生科学研究班員として、"即時型食物アレルギーの小児期発症機序に関する研究"および"アトピー性皮膚炎の既存治療法のEBMによる評価と有用な治療法の普及に関する研究"に関わっている。小児食物アレルギーの発症、耐性化機序はアナフィラキシー患児の詳細なアレルギー検査、食物経口負荷試験による評価の中からいくつかの傾向が明らかになった。このような臨床研究は、多くの患者さんの定期的な受診とフォローから成り立っており、研究結果を治療指導にフィードバックしている。アトピー性皮膚炎の治療研究では、アレルゲン除去食のEBMに基づく国際論文評価を行っている。社会的にも混乱している除去食治療の適応、有効性評価を行うことにより、食物アレルギー合併、アトピー性皮膚炎児の適切な治療・指導に役立てたい。

## ・心理研究室長 横田欣児(心療内科医長)

心療内科は横田、安田、小山、田村、松本(カウンセラー)の5人が呼吸器疾患の診療と兼ねて担当しています。本来の対象疾患は心身症で、気管支喘息の一部、過換気発作、心因性咳、アトピー性皮膚炎、慢性蕁麻疹、過敏性腸症候群、緊張性頭痛、自律神経失調症などですが、最近は軽い精神科疾患(軽症うつ病、パニック障害、不定愁訴症候群など)を診ることが増えています。研究は日常ストレスの各疾患に及ぼす影響の仕組みやストレスの治療法を探る事です。

#### ・疫学研究室長 岸川 禮子(アレルギー科医長)

当院ではアレルギー疾患とくにスギ花粉症の予防・治療に有用な情報を提供するために長年全国約20ヶ所の空中花粉を調査しています。採取していただいた花粉を染色して光学顕微鏡で見るのです。とてもきれいな形をしています。また九州地区では約50施設からスギ・ヒノキ科花粉数を報告していただき、毎年2月から4月の医師会スギ花粉情報のニュースソースの役割を務めています。花粉情報の提供によりいろいろな分野からの話が聞けてとてもおもしろいと思っています。今後は病気の原因となる空中真菌の孢子を確認したり、欧米で用いられている花粉捕集器(7-day spore trap, Burkard volumetric sampler)で調査することを全国に広げていく手伝いをしたいと思っています。職種に関係なく興味のある方は声をかけてください。いっしょにできたらとてもよいと思います。

#### ・アレルギー研究室長 上川路信博(臨床検査科長)

喘息を中心とした臨床的研究を行っています。以前より、喘息発作が秋に多いことが知られていましたが、南福岡病院の発作受診状況の解析から、秋に発作を起こしやすいのはRASTスコアが4以上のダニに対して強いアレルギーを有する患者さんたちであることが明らかになりました。このような患者さんは、特にダニ対策が有効ではないかと考え、現在、ダニ対策としての布団丸洗いの効果を検討しています。一方、一般集団におけるアレルギーの頻度を明らかにするために、昨年秋の健康診断の際、皆様にご協力いただき、各種RASTを測定させていただきました。この結果については、"みなみネット"の検査科のページに載せていますので、是非ご覧になって下さい。以上のように、診療に直結する研究を行っていきたくと努力しています。

#### ・リウマチ研究室長 吉澤 滋(リウマチ科)

リウマチ科が当院に開設されて、一年が過ぎました。本年度より関節リウマチの患者さんを対象に、院内の室内プールにて、週一回のプール教室を新たにスタートしました。関節リウマチ患者さんに対するプール療法は、理学療法の中でも極めて有用であることが知られてはいますが、特別な施設が必要であることもあり、実際に行っているところはあまり多くありません。リウマチ研究室では、リウマチ患者のプール療法の有用性について、教室参加者を対象に、一年以上の長期継続の効果についての検討を行っています。

#### ・呼吸生理研究室長 古藤 洋(呼吸器科医長)

気管支喘息やCOPDにおける病態生理の解明を目的としている。当院は豊富な症例数に加え、呼吸生理に関する優秀な検査室を備えている。また諸先生方の努力で、気管支過敏性検査や呼気NO測定がルティン化していることも特筆すべきであろう。これらのメリットを最大に生かして臨床に直結した研究を行っていきたくと考えている。臨床を通じて組み立てた仮説の検証に、動物を用いた実験を追加する設備があるのも当院の強みである。